

市民シンポジウムについて

2023年4月15日

日本生物地理学会
会長 森中 定治

今回の評議員会のおまとめをしてくださった春日井さん、日頃当学会のために様々な業務をこなしてくださっているスタッフの皆様、そして日頃暖かい目で当学会を見守り、ご指導や激励をくださる評議員の皆様に深く感謝申し上げます。

評議員会の席上で評議員から、ご自身が評議員会に参加された時は、評議員会でシンポジウムと市民シンポジウム（当時はミニシンポジウムと称しました）について意見交換をした上で、会長・副会長に一任した記憶があるという発言がありました。

もうずっと前のこと（10年以上？）であり、私も忘れていましたがその言葉で思い出し、当時のことを振り返ってみました。私の記憶なので、多少の時間のずれはあるかと思えます。少なくとも私が評議員となり、その後当学会の運営に関わるようになった当時は、毎年の投稿論文が少なくひどい時は年間に2、3報しか投稿がなく学会誌の出版も危ぶまれるという状況でした。評議員会でもそれが問題になっていたと思います。

そのような状況で、学会の大会も発表の演題が集まらず支障をきたし、どうしたものかと考えめぐねておりました。

前会長の酒井清六先生が会長を辞任され、私が学会長、三中さんが副会長の新体制でスタートした直後、当学会創設者のお一人である蜂須賀正氏侯爵の生誕100年が来るという情報を私にくださった方がいて、この学会の謂れに詳しい方をお呼びして、それをお聴きしました。そして2004年に盛大に蜂須賀正氏生誕100年記念シンポジウムを開催いたしました。私は日本学術会議の副会長（後に会長）であった黒川清先生をお呼びし、蜂須賀正氏に関わる著名人とともにこの記念シンポジウムを行いました。

そして、当学会を盛り立てていく目的で、副会長の三中さんが専門のシンポジウム、私が分野外にいささか人脈があるものですからそれを活かして当学会が社会との接点をもつという趣旨で、市民シンポジウムを行い、一般発表の他にこの二つのシンポジウムの両建てで大会を行うということで会長・副会長に一任されたものだと思います。その後この両シンポジウムが恒例になってしまったせいか、評議員会に諮り了解を得るということがなくなっていました。それがいつからかということは、私には記憶がありません。ただ前年に行った両シンポジウムについて、その内容を必ず評議員会には報告をしております。

なお、市民シンポジウム（ミニシンポジウム）の開催の趣旨の経緯（2022年度まで）は学会HPに掲載されています。

<https://biogeography.iinaa.net/link2.html>

また、この市民シンポジウムを始めた趣旨が以下に掲載されています。

http://www.ujssb.org/NL/pdf/NL_18.pdf

2023年度の内容は以下のとおりです。

市民シンポジウム「次世代にどのような社会を贈るのか？」

『人類は戦争をやめることができるのか？』

司会：陰山大輔（農研機構、当学会編集委員長）

講演：森中定治（当学会会長）

論評：山極壽一（前京都大学総長、前日本学術会議会長）、千葉聡（東北大学 東北アジア研究センター教授）、松本直子（岡山大学 文明動態学研究所所長）、石川洋行（八洲学園大学 非常勤講師）、クロージングアドレス：石井剛（東京大学大学院総合文化研究科教授）

立教大学最大のホールであるタッカーホール（600人収容）をお借りして行っていた時は、このホール満員に近いこともあったように記憶しています。その後は、この力もあったと思いますが、投稿数が増えて、会報を和文誌と英文誌に分割しても、両誌とも十分な投稿数となり現在に至っています。

私自身は、学位を分子系統で取得し、その意味で分子系統学者ですが、生物地理学に関する論文も書いています。

Phylogeography of the *Delias hyparete* species group
(Lepidoptera: Pieridae): complex historical dispersals into
and out of Wallacea

Biological Journal of the Linnean Society, Volume 121, Issue
3, July 2017, Pages 576–591, [https://doi.org/10.1093/
biolinnean/blx015](https://doi.org/10.1093/biolinnean/blx015)

でも生物地理学の専門家だけの閉じられた学会にしたいくないと私は考えてきました。無論一定の範囲内ではありますが、研究者に限らず一般市民も参加できるような催し、チャレンジ、そんなことができればより望ましいのではないかと考えてきました。それは、生物学を社会・人間のために活かすという意志を持った当学会創設者の意志にも沿うのではないかと私は考えます。

市民シンポジウムの冒頭で、私は創設者のご紹介とこの学会の持つ意味について毎年話をいたします。講演要旨にも書いています。

魚、鳥、昆虫・・・、研究対象を絞った学会もございます。当学会は動物も植物も、あらゆる生物を扱います。その意味で言えば生命を扱った学会です。創立当初は生物の種や分類それと地理や地史、言わば生物学と地理学の合わさった学問でした。現代では分子データを扱えるようになってそこに時間軸が加わりました。生命は時間を超越するものであり、その意味からは時空生物学と言ってもいいのではないかと考えています。

私には、現代社会に大きな意味を持つと思われる種問題や進化、生物多様性等に関わる問題は、この市民シンポジウムで扱うにふさわしい問題ではないかと思えます。今年の市民シンポジウムでコメントをくださった先生から、こういった学際的・分野横断的なシンポジウムはどこの学会でも開催は難しい。それなりの困難と苦勞が伴う。胆力と開催に向けての強い意志がなくてはできないという発言をいただきましたが、私としては、種々の分野を横断しできれば

市民の有識者も参加できるようなテーマの市民シンポジウムを、可能であれば今後も継続したいと思っております。

しかしながら、民主的な決定には従います。

もし、この学会ではこういったシンポジウムは無理、今後はやめた方がよいというのであればその決定に従いたいと思います。

以上